「生命の仕組み」は永久に科学者の課題であろう。私は本シンポジウムのイントロダクトリー・リマークスとして、臨床医学と医学的人類生態学の立場から私見を述べてみたいと思う。

臨床医学に於ては Integrity を基盤とし人間をとらえる。同時に単独生存が許されない事実を同時に認めなければならない。そこに社会との関連に於て個体を考える社会医学の理論が発生するのである。然し、社会を人間がその中に生存している環境の特定のものとして、これをとらえる時には Human Ecology の中に包括することも可能であると考え。この場合、人間個体を一つの Feedback の機構として考えなければならない。

臨床医学における Individualität の問題は之等の条件の中で形態、分化、機能の問題として、又、Persönlichkeit 或は Krankheitsform の問題へと発展するものと思う。

近代臨床医学の問題として、初めて之を病態生理学の立場から説いたのは、ハイデルベルクのルードルフ・クレールで1938年のことである。又、医学的な人類生態学として公衆衛生学と臨床医学を統合的に体系化を企てたのはケンブリジのレスリー・バンクスである。その後の発展として特記すべきものは Human Behavior の研究が大きく新しい臨床医学へ導入されたことである。生物リズムの考え方が自然環境のリズムとの関連で追求されたものが、ヒエビヤの問題との関係をもったことになったものである。上述の臨床医学におけるマクロ的なアプローチが、ミクロ的なアプローチと共に益々重要な意味が認識されて来たのである。

地球上における人間を含めての生物の生存の問題を臨床医学、生態医学、生物学、気象学、地球化等の立場から総合的且つ基礎的に研究して、人間を含めての生存を安全に保障する可能性を追求するものがライフサイエンスだと私は考える。

人間生存の理法—を考える場合には生物学的なミクロ的アプローチの重要さは基礎的な考え方をたてる上に意義がある。例えば生命の連続性の基礎には遺伝子 DNA が分子レベルで安定であることが必要である。同時に生物は外界に対して開放された系であるから外界の変化に対応して自己を変化させながら一見不安定に見えながら安定的に自己を維持しているのである。

クロード・ベロナルやキャノンによって唱えられたホメオスターシスの概念も今日に於ては一種の微視的環境論であって生存の理解への寄与は大きいと云わなければならない。

分子生物学による遺伝の解明と、生物環境論の積み重ねによって、人間社会の特性が社会生物学的に明かにされつつある様に思う。

人間社会がその特色とするものは先づ第一に Sociogenetic- 情報伝達のみカニズムは人類進化と密接に関係するものであって、情報が次の世代に伝達されるものである。又、子孫によってその情報が受容されるメカニズムが存在することでもあると思う。Sociogenetic System が生物自然環境の中で人類社会進

化の基礎をなすことは明かであり、その中に人間的教養が伝達受容されることも経験的事実として知られている

生物の自己生存を危うくする環境汚染の問題は科学技術の進歩、生産性の向上による生活水準の向上、国民福祉の増大の計画の副次的産物としては余りに重大な結果があらわれている。今日、南極の氷の中の酸素は故中谷宇吉郎氏の研究によれば500年毎に大きな減少を示しているそうである。之は工業化による燃焼による酸素消費量の増大の結果と考えられる。炭酸ガスの空気中における増加は、赤外線を吸収して温度の上昇が海洋に見られるもので水位の上昇による陸地の危険が考えられる場合も、極端ではあるが有り得ることである。又、水蒸気が凝結して雲となり太陽の照射量を減らすことによる生物体への影響し考えられなければならない。汚染物質の海水、地下水への侵入による資源的生物の汚染、更に、放射性物質の海中投棄による生物の汚染による生物の被害等も無視出来ない。放射線生物学の進歩によって放射線による遺伝変異が明かになって来た今日に於ては、核実験の続行等も将来の人類の生存をおびやかしている。要するに自然環境の変化が限度を越す場合には人間による制御は不可能になってしまう。そこに生物全体を人間の立場を含めて多元的に生存の安全を期さなければならぬ。

G.N.P.が二倍になると精神傷害者の数が三倍になることし定説になっている。この中で、特殊な精神衛生施策によって、むしろ十年間に減少せしめ得た事実も知られている。精神公害はG.N.P.とバランスし、都市化公害とも密接な関係にある。

自然環境の中における社会環境についての精神公害面からの検討は未だ甚だしく少ない。物質公害面の対策以上の注目を要するものと思う。

人間の生存の理法を考えて未来社会を建設するか、局部的、短期的な見方を重ねるか。人間の生存にとって運命の岐路をなすものだと思う。生物の連帯性を考察して、ミクロ的アプローチとマクロ的アプローチの総合によって未来を建設すべきであると思う。